

以上面白いと感じた箇所を適当にピックアップしてみて私自身はどんな立場になるのか、ちょっと考えて見ようと思いついたが、すぐに無駄なことが分かり中止した。分かりきったことだが個人の存在が強調されているが、個人自身には喪失感すらない。ただ訳のわからない苛立ちの日常一である。画家も同様に自分の体であって自分自身の体で無いことは分かるが、自覚というか画家というものすら見えてこない。可笑しい話だが「画家」とはと問、まずは自分自身の確立が必要になる。喪失した「画家」を捜す第一手段はクレズ館長同様、私は美術館とは全く無縁であることを知った。例えば美術館とはコンセプトの生まれる場所、世界観を変える場所と歯切れのいい言葉である。この言葉は表現しようとする者なら誰が使っても可笑しくない言葉である。いままでは作家が良く使ってきた。然し、この両者の違いは歴然としている。作家の場合、作品に表現して初めて言葉となる。当然、作品に拘束される部分がある。恐らく作家とはこの部分のことだと思うのだが、この部分を省略するとき物事は大きな転換を迎える。個人経営が株券を発行して上場するくらいの資本形態の大きな違いとなる。このことの意味は大きい美術館は総合になり画家は全くの部分となる。総合は文字を連ねて文章としてより丁寧に感動を相手に伝える。そのとき画家は一語の文字と化されて全体を象徴することが困難になる。この一文字と一化した閉塞感が現代の状況を作り出しているのかもしれない。勿論、資本主義の時代、当事者にとって有利なものが当然の手段なのだ。そのとき画家が宿命である「部分」即ち制度的に文字化を乗り越えていく「もの」が、あるのか無いのかをまずは作家自身を知る必要があるのではないか。今更、嘆いても始まらないのだ。

まずは作家自身の根源に迫るためにも一切のものを削除して見る。削除した後に残るものは常識的には作品と呼ばれるものである。描いた本人も出来上がった作品も作品から直接、言葉で観客に語りかけることはない。絵が一度、画家から離れると絵と見る側は全く画家とは別の仕組みになっている。一見、簡単のように見えて、この構造は絵の製造者には見えもしないし理解もできない仕組みなのだ。唐突だが、一字の活字で芥川賞のとれる小説は絶対はない。然し、一枚の絵で賞をとることはできる。別言すれば一枚の絵で画家の全てを表現することはできる。これは私の全くの独断だが画家が絵を描く画布は文字が初めて刻まれるのに似ている。確かに画家は全世界を表現しているのだろうが一枚の絵は一片の活字の役目も担うことができる。活字の一個には文学としての値段はつかないが、絵には驚くほどの値段をつけることができる。このことは別の所で述べているので省略する。よし仕組みの違いは分かったことにしよう。若し絵を生物として見たら、絵と生物は比較できない物かもしれないが、もう一つの仕組みを考えて見る。雁の刷り込みを観察発見したローレンツ。牛糞を丸めて後足で運ぶ黄金虫の行動を観察することによってのみ本能にロックされ守られた黄金虫の行動の意味、即ち画家自身が黄金虫であり、雁であるとしたら、画家自身には決して意識できない人間の根源的情念をどうして知ることができるのか。その時、研究者のみが観察できるただ一つの方法だとすれば第三者の目が必要な

ものとなる。もし観客が作品、即ち絵の発する感動を真に理解しようとするれば、ローレンツ、ファールに習って観察しなければ作品のもっている情念、精神というものは形として見えないし理解することも出来ない。例えば怒りの心情がどういう動作でキャンパスに移されるのか。その答えは絵の中にも本人の画家のなかにも無く、画家がキャンパスに向かって描いている動作、行動の動きの中にしか感情の真の意味は見えないことになる。この行動が画家自身で知るということは現在のところいい方法が無い。自覚に至る手段がないということだ。